

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	准教授	虎岩 朋加
最終学歴	学 位	専門分野
State University of New York at Buffalo, Graduate School of Education, Department of Educational Leadership and Policy 修了	Ph. D. in Social Foundations	教育学 教育哲学 ジェンダー論

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

本学コンセプト「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」を実現する。

【目標】

本学建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を受けて、人の成長の過程に十全に関与し支援することのできる保育士そして幼稚園・小学校の教員に求められる総合的な力の開発に、学生各自が取り組めるよう教育活動を通じて支援する。その際、「オンリーワン」としての学生に対峙する構えをもって行う。

【方針】

本学コンセプト「「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」を実現するための教育活動を行う。

【計画（方法）】

- ① 学生の表現力や感性、探求心などに働きかけられるように、また、学生自身が視野を拡大できるように、わかりやすく構造化され、かつやりがいのある教材を提供する。
- ② 様々な理由で課題を抱え学習継続に困難を感じている学生に対しては個別に丁寧な指導をおこなう。
- ③ 演習では、学生が所属意識をもてるような教育環境づくりをおこなう。

【担当科目】

（前期）

サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、教育原理、教育実習Ⅰ（幼稚園）、教育実習事前及び事後の指導（幼稚園）、教育社会学、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

サービス・ラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、教育課程論（幼・小）、教職概論（幼・小）、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

3年生の専門演習では、グループ研究を全員で行うことができた。研究テーマを設定し、研究の問いを決め、必要な研究方法をデザインするとともに、先行研究で何がわかっているかをゼミ生全員で探求した。その上で、聞き取り調査を実施して、KJ法を用いてインタビューを分析して、研究の知見を整理した。発表の準備から、また報告書の作成まで行うことができた。研究方法の種類や、研究倫理に関する講義を織り込みながら、研究の一連の過程をゼミ生全員が体験することができた。また、データ分析においては、前期に学んだジェンダーの観点が大いに生かされる

こととなり、前期から後期にかけて、有機的に繋がりまた展開するようなゼミ運営を行うことができた。学んだ知識を実践に統合することができ、ジェンダーにまつわる悩みを話し合うことのできる学習の共同体を構築することができた。

4年生の専門演習では、卒業研究の完成を目指し、文献講読、進捗状況の管理、中間発表での論文内容の批評などを行って学生が研究を進めることを確実にできるように支援した。

基礎演習では、基礎演習担当者とのチームワークを進めて、アクティブ・ラーニングを取り入れ、ワールド・カフェ、ブック・トークなどを実施した。大学で求められる基礎的スキル（ディスカッション、異なる視点の獲得、発表、分析、考察）などをアクティブ・ラーニングを通して得られるような授業を構成した。

支援を必要とする個別の学生に対しては、個別に学生と面談を持ち、丁寧に話を聞くなどの時間を持った。

講義においては、わかりやすく文節化され構造化された教材を作成し提示した。また、毎回の授業において、今回得た学びや質問などを学生が記入するミニッツペーパーを実施し、次の回の冒頭で、ミニッツペーパーに記載されていたことを抜粋して紹介し、質問には丁寧に答えたり、間違った理解を解説したり、コメントに対する担当教員からのフィードバックを行った。マイクロソフトフォームズでQRコードを活用して、その場で学生たちに調査を実施して、その内容を授業内容に反映させた。ワンノートに学習資料を配布して学生がPC上で資料に記載するように工夫した。討論活動、ペアワークなども取り入れた。また、動画教材を使用して、ケーススタディを行い、受講生全体を巻き込んだディスカッションも実施できた。

○作成した教科書・教材

「教育原理」「教育社会学」「教職概論」「教育課程論」いずれの講義科目においても、明快でわかりやすく構造化・文節化されたスライド教材を作成した。内容に基づいた課題も組み入れ、学生が毎回の授業で到達すべき学びを明らかにすることができた。

○自己評価

概ね達成できた。計画に掲げた通り、教材については、明快に分節化され構造化され、かつやりがいのある教材を提供できた。様々な理由で課題を抱え学習継続に困難を感じている学生に対しては個別に丁寧な指導を行った。演習では、学生が所属意識を醸成できる教育環境づくりを行うことができた。

II 研究活動

○研究課題

- ① 継続 多様性に配慮した包摂的教育実践の研究
- ② 継続 アフェク・セオリーの教育学への援用に関する研究
- ③ 継続 カナダ映画の人権教育への応用
- ④ 継続 新しいフェミニズムの教育学の構想
- ⑤ 継続 包摂的社会の在り方の比較研究

○目標・計画

【目標】

- ① と② 科研「政治学との接合による規範的教育学の再構築」の科研研究機関は終了したが、

本年度は、研究報告書となる論集を作成する予定となっている。「教育の生政治論」グループでは、生政治と教育との共謀について批判的に検討してきたが、「アフェクトセオリー」の教育学への援用の観点から論文を8月末の締め切りまでに原稿を完成させることを目標にしている。

- ③ 共同研究「カナダ映画の人権教育への応用」は4年目に入った。カナダ映画は多様なマイノリティを中心に据えた作品を提供してきたが、さまざまな多様性（人種・民族・性的）の交差する在り方に、カナダの多文化政策の可能性と限界が見えてくることがわかった。本年度は多様なマイノリティの中での性的マイノリティの位置づけの表象の在り方を引き続き分析して、人権教育への応用を考察することを目標にしている。
- ④ 新しいフェミニズムの教育学についての本を執筆中である、本年度出版することを目標にしている。
- ⑤ 科研「Comparing governance of lesbian communities in Singapore and Japan」は、終了したが、さらに生じた研究課題を含め、日本とシンガポールで異なる社会的な条件におかれた女性たちの日常の生活の中で、統治の効果がどのように表れるのかに関して、本研究のまとめを行うことを目標にしている。

【計画】

- ① 共同研究者とともに、研究計画を具体的に策定しているので、それに沿って、論集を出版する。
- ② 同上
- ③ 共同研究者とともに策定した研究計画に沿って、学会での研究成果の発表、論文執筆をおこなう。
- ④ 三回目の修正が終わったところなので、この後編集者と相談して出版予定を計画する
- ⑤ 研究協力者と共に、書籍のプロポーザルを書く計画をしている。

○2016年4月から2024年3月の研究実績（特許等含む）

（著書）

虎岩朋加（2021）「第6章 測定の科学と教育評価—誰が何のために測るのか」松下晴彦・伊藤彰浩・服部美奈編『教育原理を組み直す—変革の時代をこえて』名古屋大学出版会 106-122 頁

虎岩朋加（2023）「教室内での排除と差別——ジェンダー・セクシュアリティの観点から」佐藤隆之・上坂保仁編『市民を育てる道德教育』勁草書房、109-127 頁。

虎岩朋加（2023）『教室から編みだすフェミニズム——フェミニスト・ペダゴジーの挑戦』（大月書店）

（学術論文）

荒木陽子、虎岩朋加、佐藤アヤ子、岸野英美（2021）人権教育を念頭においた日加ドキュメンタリ比較——「カレシのおっぱい」と「ジェマのままで」が描く 乳房除去手術と性的マイノリティのありかた——『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』19号、19-30 頁

虎岩朋加（2022）「かくれたカリキュラム、習慣、ジェンダー——プラグマティズムからのアプローチ——」『教育学研究』第89巻第4号、579-589 頁。

虎岩朋加、池田しのぶ（2022）「メディアのLGBT主流化に見られる女性たちの位置付け——グザヴィエ・ドランの映画『私はロランス』を一事例とした考察」『カナダ文学研究』第30号、73-89 頁。

虎岩朋加（2022）「批判意識を育てることの意義とその困難——ベル・フックスの教育を巡る理論と民主主義——」『アメリカ教育学研究』第33号、東信堂。1-13 頁。

（学会発表）

荒木陽子、虎岩朋加、佐藤アヤ子、岸野英美(2021年9月11日)「21世紀のカナダ映画にみるマイノリティ表象—性的、人種・民族的マイノリティの交差をめぐって」日本カナダ学会第46回年次研究大会、オンライン開催

虎岩朋加(2021年10月23日)「批判意識を育てることの意義とその困難——ベル・フックスの教育を巡る理論と民主主義——」アメリカ教育学会第33回大会公開シンポジウム

TORAIWA, T. (December 8, 2022), “Transforming Social Norms in the Classroom: Habit, Affect, and the Gender Order,” in the Panel Session “How is the critique of bio-power in education possible?,” Philosophy of Education Society of Australia 50th Annual Conference

虎岩朋加(2024年3月2日)「今、教室ではどのような「主体」が生み出されているのか——新自由主義、ポストフェミニズム、フェミニスト・ペダゴジー」みんなのためのフェミニズム公開研究会@東京外国語大学
(特許)
(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

○所属学会

教育学会、教育哲学会、日本デューイ学会、Philosophy of Education Society、日本女性学会、日本カナダ学会、日本カナダ文学会、

○自己評価

- ① 概ね達成できた。論集の出版社が決まり、担当する章を執筆して提出した。生政治と教育との共謀について批判的に検討し、「アフェクトセオリー」の教育学への援用の観点から執筆した論文を完成させた。
- ② 同上
- ③ 概ね達成できた。カナダ映画を通して非異性愛者ならびに異性愛者のアイデンティティの困難をめぐる論稿に関して、共著者として理論的枠組みを提供し、投稿した。
- ④ 概ね達成できた。2023年10月に著書を出版した。
- ⑤ 達成が不十分である。本年度は、個々の非異性愛の女性たちの日常の生活の中で、統治の効果がどのように表れるのかという本研究課題のテーマをめぐり研究のまとめをおこなうことを目標にしていたが、他の研究との兼ね合いで、じっくり執筆に取り組むことはできなかった。書籍のプロポーザル執筆を進めたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

学部学科、委員会などの役割を理解し、大学運営に貢献する。

【計画】

所属する学部、委員会のそれぞれの事業計画に即して、割り当てられた任務を遂行する。

○学内委員等

幼小教職課程・保育士養成部会、国際交流センター運営委員会、教務委員会

○自己評価

概ね達成できた。所属する学部や、委員会、作業部会それぞれの事業計画に即して、割り当てられた役割を理解し、遂行することができた。学科会議、教授会の議事録担当として滞りなく議事録を作成することができた。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

研究成果を教育活動に還元するとともに、社会に広く共有する。

【計画】

国内・国外での研究成果の発表により、研究成果を広く社会に共有するとともに、学会での研究交流から得た知見を教育活動に還元する。

○学会活動等

教育哲学会編集委員（2021年9月～現在）

日本デューイ学会紀要編集委員会（2022年10月～現在）

日本デューイ学会監査（2022年10月～2023年9月）

○地域連携・社会貢献等

新潟県人権施策懇談会委員（2020年4月～現在）

新潟市男女共同参画推進センターアルザにいがた主催アルザフォーラム2023分科会講師「その生きづらさはどこからきてる～見えないしほりを考える～」（2023年11月19日）

NPO 法人参画プラネット実践研究所メンバー

○自己評価

概ね達成できた。新潟県人権施策懇談会委員として意見書を作成したりして、研究成果の社会への還元ができた。新潟市が主催するアルザフォーラムに講師として参加し、著者の内容をもとに講演を行なった。参加者アンケートでは講座の満足と100%だったとの報告を得ている。NPO 法人参画プラネット主催の実践研究所にもメンバーとして参加し、市民活動への研究成果還元を行うことができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

学会や研究会へ積極的に参加し、研究・教育へのモチベーションを維持し向上させる。

VI 総括

教育活動、地域連携・社会貢献活動については、概ね計画を達成することができた。研究活動については、一部遅れが見られるものの、共同研究では、役割と目標を遂行することができた。ライフワークとして取り組んできた、フェミニズム教育に関する原稿が完成し、出版することができた。書籍の合評会では概ね好評を得ることができた。学会では一般研究発表での司会や、編集委員を担当して、学会活動に貢献することもできた。大学運営では、幼稚園実習の副担当として、主担当の先生をサポートできた。オープンキャンパス模擬授業の講師を担当して、大学の広報に貢献した。

教育活動、地域連携・社会貢献活動、研究活動のいずれも、ある程度計画を達成することができ、大学教員としての役割を十分に遂行することができた。

以 上